

令和5年度（2023年度）実施報告書（総説：鳥谷智文）

本年度は、「島根半島・宍道湖中海ジオパーク地域における産業と、産業に伴って形成される景観の特徴」と題して、鳥谷智文、杉谷真理子の2名により、主として近世～現代にかけての史・資料の分析を行ってきた。本年度は、行動制限も緩和され、対面式による学会での研究報告及び情報収集、地域住民への対面式での研究成果報告などが実施できた。

無論、インターネットを活用した分析も継続して行った。

古代～現代の特に産業の特徴を担当する鳥谷は、近年史料の分析を進めている乃木公民館所蔵文書より、近世から近代にかけて乃木村の重要な産業について分析を進めていった。また、奥出雲町の絲原家所蔵文書より、近代における農業振興、特に松江市乃木に設置された植物試験場の特徴も分析した。そして、乃木地区の代表的な工業である鋳物業についても分析を進めることができた。

島根半島・宍道湖・中海周辺における景観の特徴を担当する杉谷は、昨年明らかにした校歌にみられる景観特性をもとに、ジオパーク学習を学校教育で行う際の手がかりとして、先行事例をまとめ、課題を抽出した。

研究状況の詳細は、以下に記載されている各人の実施報告書を閲覧していただきたい。

行動制限が大きく緩和されたといっても、当初の研究計画にあった聞き取り調査など地域の人々の居宅へ伺い、長時間にわたり調査する活動などはできなかった。その中で、今回は研究代表者を中心に、公民館を拠点に研究成果を市民へ発信でき、また、松江市文化スポーツ部文化財課歴史まちづくり係の協力の下、実際に市民と乃木地区の産業に関係する寺社、関連地域を歩き、解説し、参加者の理解を深めていけたのは成果と考えている。

本年度の研究業績についても下記の各人による報告に記載している。但し、業績については、ジオパークに関連するものだけでなく、もっと大きな範囲での研究業績も含め記載している。また、業績には、インターネットを利用したオンライン配信についても記載した。参考にしていただければ幸いである。

1. 研究進捗状況

乃木公民館所蔵「旧乃木村役場文書」において、中條家を中心とした和紙生産について、史料を翻刻し、原材料調達、製造過程、製品流通、製品金額などを示した。また、絲原家文書（島根県仁多郡奥出雲町）の分析から端を発して、絲原権造氏の農業振興事業の中で、島根県が乃木村に建設した植物試験場（後の農業試験場）について分析し、その評価について、明治16年（1883）、全国を巡察していた元老院議員榎村正直の書き記した史料（「島根県管内巡察記巻上」（明治十六年、国立公文書館アジア歴史資料センター<https://www.digital.archives.go.jp/img.pdf/633576> レファレンスコード A03022994000））を取り上げた。本史料から植物試験場の評価について、

- ・ 勸業課所轄の植物試験場は、内外ノ勸業果樹等を試作し、良種善苗を管内に配布し、農業の改良進歩を謀ることを趣旨とし、人々が洋種ノ瓜類を大いに請求し、米国の甘蔗から砂糖を製造することを伝習し大益を得たということについては信用し難いとするが（製糖については、明治12年（1879）、清国種芦粟及び米国種芦粟（琥珀甘蔗）を栽培し、製糖試験を実施したがうまくいかず、翌年製糖熟練者を招聘し管内の有志に伝習させたとある（『島根県勸業年報第二回』、『新修島根県史』通史篇2近代、pp.130-131、1967）、他の植物試験場と比較して、種々の珍菓奇草は少なく、専ら民間で必要な苧麻桐桑等を植え、桑苗は昨年迄に21万3500余本を払い下げた点が勝っている。
- ・ 稲作の試験は、明治11年（1878）から各地で有名な種子を購集し、試みに植え、挿秧耕耘法も年々試み、とりわけ水撰、水浸、土圍および県下従来ノ旧慣法等を試み、水撰法が大いに優れていることを発明し、稲種水撰説をまとめ、これを各郡村にわかち、また有志者を集め、その簡便なことを説諭した。

とあるように、全国的に見ても珍菓奇草の観覧ではなく、実質的な農業振興を実施していたとした。

乃木村を中心にかつて栄えた鋳物業については、島根県古代文化センターからの要請もうけて史料を分析した。分析によると、松江藩の藩営事業である釜甌方から、明治維新後の民間への払い下げを受けて、主として綿打弓弦の製造・販売を行っていた松江天神町の島谷理右衛門が鋳鉄会社の社長として事業を引き継ぎ、その後遠所長太郎が乃木村に遠所鋳物工場を設立したりして発展していったことを研究報告で示すことが出来た。

昨年度に引き続き分析を進めている乃木公民館所蔵「旧乃木村役場文書」において、内国勸業博覧会関係史料より、乃白の中條家をはじめとした和紙生産について、蚕種郵送器の製造について、その分析結果を市民に発信しはじめた。また、鋳物生産については、島根県古代文化センターの主催で、対面式での講座、インターネット配信が出来た。

現地での講座を積極的に実施できたことは、地域に居住する方々への研究成果の還元という意味で一定の成果と考えている。また、インターネット配信は、遠方への発信という意味で良かったと考えている。

実地の詳細については、下記業績から辿っていただければと思う。

今後、研究の進展を広げていく方向性の模索、さらに研究成果をどのように地域づくりに活かしていくのか、具体的な動きを考える必要があるだろう。

2. 業績

○著書：

なし

○論文・研究ノート・講演論文等：

- ・鳥谷智文：幕末～明治期におけるたたら製鉄業の経営方針と推移、菅谷たたら山内総合文化調査報告書 5、(公財)鉄の歴史村地域振興事業団、pp. 1-16、2024. 3 (刊行予定)
- 学会発表・講演等：
 - ・鳥谷智文：乃木公民館所蔵文書を読む⑯「第3回内国勸業博覧会出品物―内国勸業意博覧会関連史料から―」、郷土の歴史教室(松江市乃木公民館)、松江市乃木公民館、2023. 8. 3
 - ・鳥谷智文：明治10～20年代前半における絲原家の動向(中編)―「農事日記」から見える日々の動き―、第12回中国地方たたら懇話会(公益財団法人絲原記念館)、中国地方たたら懇話会、2023. 9. 2
 - ・鳥谷智文：郷土の歴史教室乃木公民館所蔵文書を読む⑰「第3回内国勸業博覧会出品物―内国勸業意博覧会関連史料から―」、郷土の歴史教室(松江市乃木公民館)、松江市乃木公民館、2023. 9. 7
 - ・鳥谷智文：松江藩釜甕方の史料と研究3 ―釜甕方の系譜をひく鑄物業者の基本的な経営概要―、島根県古代文化センター テーマ研究「鑄物と鑄物師の研究」第3回検討会(島根県古代文化センター資料整理室)、島根県古代文化センター、2023. 9. 9
 - ・鳥谷智文：令和5年度松江市歴史のまち歩き④乃木地区 湖と里山にいだかれた自然を巡り古の生業を探る「乃(野)白の製紙業」、令和5年度歴史のまち歩き④乃木地区(野白神社、福正寺、紙屋口、日吉神社)、松江市文化スポーツ部文化財課歴史まちづくり係、乃白町ふれあいセンター、2023. 9. 16
 - ・鳥谷智文：なべとかま ～たたら鉄がささえた台所～ 松江藩釜甕方の特徴、島根の歴史文化講座第2講、島根県古代文化センター、松江テルサ1階テルサホール、2023. 9. 23
 - ・鳥谷智文：乃木公民館所蔵文書を読む⑱「第3回内国勸業博覧会出品物―内国勸業意博覧会関連史料から―」、郷土の歴史教室(乃木公民館)、松江市乃木公民館、2022. 10. 6
 - ・鳥谷智文：吉田のまちなみ、第5回たたら塾 雲南市たたら伝道師検定対策講座①「観光ガイド伝授講座」(雲南市吉田健康保健センター)、公益財団法人鉄の歴史村地域振興事業団、2023. 10. 14
 - ・鳥谷智文：「郷土の歴史教室」でわかったこと(パネル展示、解説)、乃木文化祭(松江市乃木公民館)、松江市乃木公民館、2024. 10. 29
 - ・鳥谷智文：乃木公民館所蔵文書を読む⑲「第3回内国勸業博覧会出品物―内国勸業意博覧会関連史料から―」、郷土の歴史教室(乃木公民館)、松江市乃木公民館、2022. 11. 2
 - ・鳥谷智文：2023年度「学生研修旅行」～雲南市から奥出雲へ 鉄(たたら)の技と暮らしを訪ねて～(解説)、2023年度「学生研修旅行」(菅谷たたら山内、絲原記念館、奥出雲たたらと刀剣館)、放送大学島根学習センター、2023. 11. 12
 - ・鳥谷智文：松江藩釜甕方の系譜をひく鑄物業者―鳥谷家を主たる事例として―、たたら研究会令和5年度広島大会(広島大学東千田キャンパス未来創生センターM304講義室)、たたら研究会、2023.11.25

- ・鳥谷智文：乃木公民館所蔵文書を読む⑩「第3回内国勸業博覧会出品物—内国勸業博覧会関連史料から—」、郷土の歴史教室（松江市乃木公民館）、松江市乃木公民館、2023. 12. 7
 - ・明治10～20年代前半における絲原家の動向（第2報）、日本技術史教育学会2023年度全国大会（北九州・小倉）（西日本工業大学小倉キャンパス）、日本技術史教育学会、2023. 12. 9-10
 - ・鳥谷智文：たたら製鉄を中心とした多角経営—経営はどのようにして成り立ったのか？—、第1回たたらサミット島根（松江テルサ4階中会議室、島根県立松江南高等学校グラウンド）、ものづくり教育たたら、2024. 1. 20-21
 - ・鳥谷智文：乃木公民館所蔵文書を読む⑪「第4回内国勸業博覧会出品物—内国勸業博覧会関連史料から蚕種郵送器—」、郷土の歴史教室（松江市乃木公民館）、松江市乃木公民館、2024. 2. 1
 - ・鳥谷智文：『雲南のたたら文化』を読む、第10回たたら塾伝道師検定対策講座②「試験対策講座」（雲南市吉田健康福祉センター）、公益財団法人鉄の歴史村地域振興事業団、2024. 2. 8
 - ・鳥谷智文：柴田家文書から見える社会状況—ヒト、モノ、カネの動き—、第18回安来市歴史文化講座（伯太中央交流センターわかさ会館）、安来市教育委員会文化課、2024. 2. 18
 - ・鳥谷智文：大原新田をどのように解説するのか？—史料からその一例の紹介—、第14回中国地方たたら懇話会（公益財団法人絲原記念館）、中国地方たたら懇話会、2024. 2. 24（予定）
 - ・鳥谷智文：乃木公民館所蔵文書を読む⑫「第4回内国勸業博覧会出品物—内国勸業博覧会関連史料から蚕種郵送器その2—」、郷土の歴史教室（乃木公民館）、乃木公民館、2024. 3. 7（予定）
- その他：
- ・ケーブルテレビ：郷土の歴史教室（mable まるまる松江金曜ぷらすの中で紹介）、山陰ケーブルビジョン株式会社、2023. 4. 7
 - ・インターネット配信：なべとかま たたらの鉄がささえた台所、しまねの歴史文化 どこかで誰かに話したくなる島根の歴史、しまこだチャンネル、2023. 10. 24～
 - ・ケーブルテレビ：たたら文化伝道師と行くたたら旅、雲南市・飯南町事務組合ケーブルテレビ事務局雲南夢ネット、2023. 11. 8～9
 - ・新聞記事：松江藩釜甌方の鋳物生産 藩専売制度の一翼を担う、山陰中央新報、7面（文化）、2023. 12. 28

3. 学会表彰など

- ・日本技術史教育学会 優秀講演論文賞、タイトル：第4回内国勸業博覧会関係史料からみた乃木村の蚕種郵送器製造、日本技術史教育学会、2023. 7. 8

1. 研究進捗状況

昨年度は、当該ジオパーク内における公立中学校の校歌における景観描写の分析より、島根県の学校教育におけるジオパーク学習展開の可能性について触れた。この成果をもとに本年度は、実際に各地で行われているジオパークの活用事例を文献等を用いてまとめ、当該ジオパークの学校教育での活用について示唆を得ることを目指した。



図1

(北海道地図株式会社のウェブサイトより転載し加筆した)

図1は、2021年3月時点での、ユネスコ世界ジオパークを含む国内のジオパークの位置を表わしたものである。今回の研究で事例として参考にしたジオパークについては、名称に下線を引き示した。10ヶ所のうち6カ所は日本ジオパークに認定されたものである。

実施形態について、学校独自の学習計画や教科横断型教育の事例では10件の報告が見ら

れた。糸魚川(竹之内・糸魚川ジオパーク協議会、2014 および竹之内、2016)、島原半島(寺井、2015)、白滝(熊谷、2015 および杉山、2018)、箱根(長谷川、2018)、ゆざわ(中三川、2018)、栗駒山麓(中川・小林、2018)、三笠(上野、2018)、室戸(柚洞ほか、2016)であり、重複を除くと8カ所となる。また、理科教育における実施事例は4件あり、恐竜渓谷ふくい勝山(三好ほか、2019)、山陰海岸(亀田、2021)、ゆざわ(田口、2018)、島原半島(高橋・土本、2016)が舞台となっている。

学校独自のカリキュラムとして、特に好事例として挙げられるのが、竹之内・糸魚川ジオパーク協議会(2014)と竹之内(2016)による糸魚川ジオパーク内での取り組みである。子どもの発達段階を考慮し、0~18歳までの一貫した教育が2011年度より実施され、「糸魚川ジオ学」と名付けられている。ジオパーク学習が学校教育のなかで明確に位置付けられており、教員向けの研修や学習支援のみならず、「ジオ給食」(大地の恵みと食の繋がりを知り、郷土愛を育むことを目的としている、月1回の特別給食)の設定など、島根半島・宍道湖中海ジオパークでのジオパーク学習の参考となり得るものもみられる。他には、防災教育の一環で行われるジオツアー(野外観察)の事例を挙げた寺井(2015)の報告も、小中学校の連続性や児童・生徒の視点を考慮している点など、学ぶところは多い。

また、上述の事例報告では、現段階でジオパーク学習を展開する上での課題も多くみられた。これは今後の学校教育におけるジオパーク学習の推進に際して、検討の必要があるべきものといえる。以下、要約して示す。

①教授側の課題

現状では地学を専門とする教員がほとんどおらず、教員への支援とその方法の検討が必要である(亀田、2021)。加えて、ジオパークに関連する学問は、地学だけでなく民俗学や文化人類学、文学といった他の領域の学問も参画すべきであるが、人材的な確保が難しい(柚洞ほか、2016)。事前学習・事後学習が重要であるが、準備等で教員の負担が増加する(熊谷、2015)。学校教育へジオパーク学習を導入するにあたり、教授する教員の専門性や力量に左右され、人事異動による活動の断絶の可能性があること(竹之内、2016 および熊谷、2015)。また、まずは教育委員会において、ジオパークが教育に効果的であるという理解や共通認識が必要となること(竹之内、2016)。ジオパーク活用の成果は、教授側の明確な目標設定があってこそ得られるものであり、ジオパーク側も学校の要求に合わせてプログラム等の提供をできるように協働の仕組みづくりが重要である(中川・小林、2018)。

②ジオサイトの活用に関する課題

地域の自然を生かした学習は、ジオパーク周辺の学校では成立する可能性があるが、どの地域でも成立するものとはいえない(田口、2018)。ジオサイトの特徴により、教科によって活用され易さが異なり、学校からの距離など地理的な制約が存在する(高橋・土本、2016)。教員へのアンケートからは、ジオサイトまでの距離によって、時間や交通費が多く必要となる点も懸念事項として挙げられている(高橋・土本、2016)。

上記の他にも、ESDやSDGsを絡めた枠組み・目標の設定が必要となること、学習時間(機会)の確保をどのように行うかという点も指摘できる。また、教科横断学習として展開する

際に、総合的な学習、理科教育、社会科教育の連携が解かれているものの、社会科教育における事例があまり見られなかった点も、今後の課題として挙げられる。志村(2018)が「自然と人文・社会と結びつけるのは地理学習以外にはない」と主張するように、今後ジオパーク学習において人間社会との関わりについての学びを深めるにあたって、社会科教育分野での更なる議論が望まれる。

参考文献：

上野莉紗(2018)「三笠ジオパークと学校教育」日本地理学会発表要旨集 2018年 2018s 巻 S206

亀田直記(2021)「山陰海岸ジオパークで地学を学べるデジタル教材の作成—地学が専門でない教員への支援—」理科教育研究 Vol. 62 No. 1pp. 73-81

熊谷誠(2015)「ジオパークと学校教育の持続的な連携体制の確立に向けて～白滝ジオパークと白滝小学校における「石育学習」の実践例～」地学教育第 68 巻第 2 号. pp. 101-102

志村喬(2018)「これからの地理・社会科教育におけるジオパークの可能性」日本地理学会発表要旨集 2018年 2018s 巻 S203

杉山俊明(2018)「白滝ジオパークと北海道遠軽高等学校の教育」日本地理学会発表要旨集 2018年 2018s 巻 S204

高橋泰道・土本遥加(2016)「島原半島ジオパークを活用した理科授業の現状と課題」日本科学教育学会研究会研究報告 Vol. 30 No. 8pp. 67-72

田口瑞穂(2018)「地熱の広がりに着目した理科学習の可能性:ゆざわジオパークにおいて」日本科学教育学会研究会研究報告 Vol. 33 No. 1pp. 51-54

竹之内耕・糸魚川ジオパーク協議会(2014)「ジオパークが後押しした学校教育と社会教育における新たな展開—糸魚川ジオパークを例に—」地学教育と科学運動 73 号. pp. 14-20

竹之内耕(2016)「ジオパークの視点を導入した学校教育と社会教育の進展—糸魚川ユネスコ世界ジオパークを例に—」地学雑誌 125(6). pp. 795-812

寺井邦久(2015)「島原半島ジオパークを活用した防災教育」地学教育と科学運動 74 号 pp. 3-8

中川理恵・小林美月(2018)「学校教育とジオパークの協働活動について—栗駒山麓ジオパーク学習の実践から」日本地理学会発表要旨集 2018年 2018s 巻 S208

中三川洗太(2018)「ゆざわジオパークで育む郷土への関心—学校教育を補完するジオパーク学習—」日本地理学会発表要旨集 2018年 2018s 巻 S207

長谷川宏一(2018)「箱根ジオパークを舞台にした教科横断型(地学・地理)野外巡検授業の展開」地学教育第 71 巻第 1 号. pp. 23-24

三好雅也・畑中健徳・吉川博輔・藤井純子・馬渡秀夫・小林暉・内山田朋弥・山本博文(2019)「マグマ生成実験を活用したジオパークの小学校における火山教室」地学教育 第 71 巻 第 3 号 pp. 57-69

柚洞一央・山下聖・高橋冨(2016)「室戸高校における地理学的視点を取り入れたジオパーク教育」地学雑誌 25(6)pp. 813-829

参考 URL :

北海道地図株式会社ウェブサイト (<https://www.hcc.co.jp/hcc1ab/20210312/>) 最終閲覧日
2024年2月20日

2. 業績

○学会発表等 なし